

乱

RAN 8
麦社通信

『特集・カウンター・カルチャ』

〈風俗〉と〈状況〉——富田
プロヴォと妖精党——蔵田
ヒッピーといえど——秋山
「緑色革命」によせて——江川



和田久太郎著（改造文庫復刻版）

獄窓から

付 秋山 清 解説
鈴木清順 物語村木源次郎

大杉栄。その名は広くたかいた。しかし大正無政府主義の運動は、もちろん、彼のみにあらず。日本の歴史と暗い状況を負った若き魂の群れ、心やさしき叛逆者たちの生き死にを、今ここに直視せよ。時代はなお暗い！ 大杉虚殺の復讐に命をかけた無期囚・和田久太郎の獄中手記・書簡の問いかけるものは何か。B 6・三三〇頁・九〇〇円

遊俠一匹

加藤泰の世界

東映の一匹狼とは。日本劇映画の中にひたすら庶民の生活心情と「戦後」への憤怒を描き続ける監督、それは戦中派・加藤泰 A 5・四二〇頁・一五〇〇円

取扱書店 新宿・紀伊国屋／模索舎 早稲田・安藤書店／文献堂 神保町・書泉グランデ／東京堂 池袋・芳林堂 国分寺・アヴァン書房 横浜・ルビコン書房 名古屋・ウニタ 京都・三月書房／京都書院 神戸・イカロス書房 小倉・未來堂／金栄堂 以上の書店でお求めにならない方は、直接幻燈社へ。
■幻燈社 東京都中野区弥生町2の31の4 電話（三八四）五四〇三

|| 情況 ||

●十二月号||特集

ウェーバーと現代マルクス主義（発売中）

マックス・ウェーバーと大学問題	折原 浩
諸マルクス主義へのウェーバー的視角	林 道義
大塚久雄・内田芳明批判——その方法について	田川 建三
ウェーバーにおける組織論の基本的構造	湯浅 赳男
△近代知▽の限界と共同主観性	吉村 聖
悟性の危機——ウェーバーに関する一章	メルロリボンテイ
	山崎カヲル訳

情況出版 東京都新宿区戸塚三一六〇 渡辺ビル（三六八）〇七七〇

△風俗▽と△状況▽

—反文化への一視点—

富田 仁

1

△風俗▽という語を△現実▽と対比させて語っていたのは、確かまだ売れ出しの間もない頃の金井美恵子であったと思う。そこでは、△現実▽は生活の匂いのする重苦しいものとされ、△風俗▽はそれに対して身軽な楽しいものとされていたように記憶する。

これは、私達を取りまく環境について考える際の一つの示唆を与えてくれているように思われる。つねに私達の生活とともにある環境について、その一面を生活の重さ、すなわち生身の現実と理解し、別の一面を、そうした重苦しい生活からは少し隔った、何かしら楽しいものとして理解するということ、こうした思考の形式は、金井美恵子でなくとも、私達は、いつしか、どこかしらで採っているのではないかと思う。

このこと自体の当否を問うのは、今の私に与えられている課題ではない。ただ、私達を取りまく環境——それはまた当然にも私達自身が形成しているものでもある——について、多くの場合、私達は、今まで述べたような二面的な理解をしているものだと、多くの場合、私達は、今まで述べたような二面的な理解をしているものだと、多くの場合、私達は、今まで述べたような二面的な理解をしているものだと、多くの場合、私達は、今まで述べたような二面的な理解をしているものだと、決して無駄なことではないだろう。

さて、本論に入る前に、以上のことを前提として、私なりに次のように言葉の定義をおきたい。私達を取りまいている環境を、主体的に関りのあるものとして理解する場合に△状況▽という言葉を用い、そして、環境を受け取る側として、主体的

な意志に無関係に、否応なくさらされてしまう場合の環境を「風俗」 \vee という言葉を用いて示して行こうと思う。言いかえるならば、まずもって生身の現実として私達に対して示している環境が「状況」 \vee であり、そして、その「状況」 \vee が、文字通りに風化され、俗化されて、もはや私達の対立物としては感じられないような存在になった場合のものが——それは、私達がそうした環境に慣らされ、呑み込まれていることを意味するのだろうか——「風俗」 \vee である、と私は理解しているわけだ。

2

「文化」 \vee というものが私達を取りまき、また私達がこれまで形成してきた環境の一つの形態であることは間違いない。とすれば、カウンタア・カルチュアという、既成の「文化」 \vee への反抗の形態、「反文化」 \vee というものも、誰かがその回りに形成しようと試みている環境の一形態であろう。問題なのは、「文化」 \vee は、ほとんどの場合、私達にとっては「風俗」 \vee として現われるに過ぎないのに対し、カウンタア・カルチュアは、それを受け止めるものすべてに対して、つねに「状況」 \vee として立ち現われるという点にある。

勿論、「文化」 \vee にしても、それを形成しつづけてきた人類の歴史の担い手達から見れば、それは決して「風俗」 \vee ではなく、己れの主体を賭けてきた「状況」 \vee の所産であるだろうことは疑えない。しかし、そうした「文化」 \vee は、それが普遍化され、体制化されるに従って風化して行き、環境の形成者である個々の人間主体との緊張関係を失なってしまう、すでに存るものとして享受されるだけのものになってしまう。のみならず「文化」 \vee は、主体との関わりにおいて、主体そのもの意志を超えてそれを呑み尽くし、個々の主体の手の届かぬほど巨大なメカニズムとして、私達を単にそのメカニズムの交換可能な極小の部分品として支配するまでに発達してしまっていると思われる。

「文化」 \vee が、このような巨大なメカニズムと化し、私達の手に触れることのないシステムとして私達に君臨するようになった主要な原因としては、それが複製によって拡大し浸透することによって、私達の環境を画一化するようになったことがあげられると思う。

言うまでもないだろうが、私達は今や複製の「文化」 \vee なくしてはその環境を維持し得ないほどの状態にある。大量生産^{マスプロダクション}しかり、大量伝達^{マスコミュニケーション}しかり、であり、そして多

くの場合、私達はそれらを大量消費することによって今日の生活を築いている。ここでは、独自のな生活の構築はないし、主体的な環境の開拓もない。あるのは、**量として計算可能とされ、また他者と代替（交換）可能なものとして想定されている**、いわば顔のない人間の生活である。そしてこの時、そのような想定をする主体は、そうした**大量複製文化**によって利潤を追求する体制 \parallel 資本主義のみならず、そうしたシステムからはじき出されることを恐れ、**一般化への志向を持ってしまふ**、大量複製文化の支えであり、その受け手でもある多くの、 \wedge 文化 \vee を \wedge 風俗 \vee として理解している人々でもあるのだ。

3

ところで、こうしたシステムは、人間を計量可能なものとして想定してこそ安定的に維持されることは明らかである。しかし、私達は、常に計量可能な存在としてその生活を送っているわけではない。こうしたシステムによって一般化され、画一化された生活を、**自分の創り出すもの**としてではなく受け取りつづけて行くことは、**自己の生活を他者、それも自己が直接に接触を持つことも介入することも不可能な他者に委ねてしまふことを意味している**わけで、そこから、そうしたシステムへの、計量不可能な部分からの反撃が始まり、自己の生活を自己の手に奪還しようとする試みが行なわれることになると考えられる。私は、それをカウインタァ・カルチュア、すなわち \wedge 反文化 \vee だと理解しているのである。

ベ平連の運動が開始され出す少し前、アメリカの大工業地帯（おそらくデトロイトあたりだと思う）の住民達のなかに、**蛍光灯から普通の白熱電灯に自宅の照明を取り換えることが流行したという記事が、何かに紹介されたことがあった**。なかには、**電灯ではあきたらず、ランプや蠟燭に切り替えるものもあつたという**。そこでは、**会社や工場と自宅とがまるで変りばえのしないものになったこと**にいや気がさしたためと説明されていた。ランプや燭台などは、古物屋で見つけ出したり、自分で作ったりしたというから、これを自己の生活に自己の手に取り戻す試みとみなしても差支えないだろう。そして、アメリカではこの頃から、日本ではやや遅れて、日曜大工が流行し始めたのも、そうした現象の一つと見られるだろう。

\wedge 手づくりの…… \vee 、これは別にベ平連の運動にのみ限られるものではあるまい。今述べたことも、それこそ、**既成の大文化に対して \wedge 手づくりの文化 \vee を創出**

しようとする試みと呼べるだろう。カウンタア・カルチュアは、もはや手づくりではあり得ない既成文化に対して、手づくりの文化を創出する、つまり、環境を自己との緊張関係の射程内に把えておいて、主体的な関わりの下に創出し、開拓して行こうとするものであると思われるし、そうする限りにおいて、カウンタア・カルチュアは、常に△状況▽のまま我々に対峙する環境と、それを創出しようとする形成主体の行為の総称として把えられるだろう。

4

ところで、△状況▽を△状況▽のままとどめておくことが、非常に困難な作業であることは言うまでもあるまい。△状況▽を主体との緊張関係のうちにとどめて続けておくためには、その環境の大量複製化を許さない方策をとるか、あるいは自らを△風俗▽の中に投入し、大量複製文化の尖鋭として△風俗▽との緊張関係を作り出すことよって、△風俗▽を△状況▽に逆転させるしかないだろう。

一般に、カウンタア・カルチュアと呼ばれているもの、または原始共産制的な共同体を志向する一部のコミュニケーション運動が志向するのは、おおむね前者のようである。

コミュニケーション志向の運動は、それが自らの環境を自らで切り拓くといった志向を有しているわけだから、或る種のカウンタア・カルチュア運動と呼べるだろうが、こうした運動の特徴、そして一面での限界と言えるものがここに現われていると考えられる。それは、自己完結的というか閉鎖的というか、ともかくも、全面的な資本主義Ⅱ柔軟型高度管理体制の△抑圧的寛容▽の中での、全体としては無視し得るほど小さな孤立的な部分になってしまおうという問題である。

大量複製化を許し、模倣者や追隨者を生み出すこと、あるいは彼らの直面していた△状況▽を、一般的なものとして見なさせてしまおうほどに大量複製化を許すことは、彼らが個別的なものとして有していた環境との緊張関係の中に夾雑物を入れ、もしくは稀薄化することになってしまおうわけだから、それらが、自己と環境との関係を拮抗的なものとなしつづけるために、他者の介入を許さなくなるのは必然のなりゆきかも知れない。しかしながら、そうした方向性は、集団としての彼らを、総体としての社会から隔絶させ、彼ら以外に対してはほとんど影響力のないものとしてしまおうという限界を持つ。

日本で、共同体運動と呼ばれているものも多くが、社会的な△状況▽の変化に、応々にして直接対応しようとしなないのは、このことの逆証として、彼ら自身の△状況▽が、すでに社会総体の△状況▽とは別のものであることを示している。社会から隔絶していればいるほど、その△反文化▽は、既成の△文化▽に与える衝撃を弱め、抗義の意味を失なって行くのではないだろうか。

5

△風俗▽の中に己れを自ら投入することによって、既成の△文化▽に対抗しようとした数少ないグループの一つを私は知っているが、彼らは今、その活動を止めてしまっている。

それは、アップル・ハウスという事務所を拠点に、そこを家出人のセンターとして、出入り自由の開放的な共同体とも呼べる形で維持していたグループである。彼らは、マスコミに機会あるごとに売り込んで、大学拒否やら、家出やら、あるいは東大全員入学などをアピールしつつけて、そのことにより、既成の△文化▽への反撃、△状況▽を△風俗▽化してしまふ最大のメカニズムである大量複製文化の担い手であるマスメディアの逆利用を計ろうとしていた。

結局、主要にはおそらく経済的な事情によって彼らはその活動を止めたと思われるが、彼らの試みのうち、活動を続けながらも、己れを△風俗▽化メカニズムの対象としつつけることによって、それと緊張関係を生み出して行くことと、そうした△風俗▽に徹しようとするにより、社会総体の環境と自己の環境にズレを生じることのないようにしようとした開放的共同体への実験は、いつかきちんと評価し、点検しなければならぬと思われる。

日本における△反文化▽は、フウテンが、そのほとんどをヒッピーもどきのファッションに終らせるか、あるいはごく一部を信州の山へ追いあげたごとく、たちまちにして△風俗▽になってしまいか、自己閉鎖的なものとなってしまいかしかなないようにさえ思われるのだが、そのなかで、家出人のための解放区を設定して、そのアピールをマスコミを通じて行なっていたのは、閉鎖的にならなかつたかなり特異的な例ではないかと考えられるからである。寺山修司のような△家出のスズメ▽のあり方とは違ったものが、そこには見られてくると思われる。

繰り返すまでもなく、カウンター・カルチュアは自己奪還の一つの形態である。しかし、以上に見てきたように、それが体制への反撃の拠点となり得るかどうかは、状況風俗化するメカニズムにどう対処するかによって、またその活動を自己完結的なものとするか否かによって、かなりの幅をもって考えねばならないと思われる。

おそらくは、カウンター・カルチュアは、それを目的とした運動としてではなく、自己奪還のための総合的な活動の所産として、たとえば、常に現行社会との緊張関係を失なわないような形態において構築される、自己完結的ではない共同運動の一つの所産として現われるときにこそ、既成の文化への反撃の大きな力となり得るのではないかと考えられる。

カウンタァ・カルチュアが、文化に対してのカウンタァパンチとなり得るためには、風俗として一切を呑み込むメカニズムを、総体として破砕するだけの力を持ったときであろうと思われるし、カウンタァ・カルチュアが、状況の風俗化への異議申し立てであり、与えられた文化に対して、手づくりの文化を配置することによって、己れと環境との緊張関係を取りもどす試みであると思われるからである。

それがどのようなものとなるかは、実際の活動の総括をふまえて検討されねばならないであろう。

IWT 労働相談開始

東京地区一般合同労組（IWT）は、体制からも「反体制」からも疎外された未組織・臨時労働者を中心に自立的連合的運動を模索的に追求しているが、活動の一環として、労働相談日を設定し、労働者の直面する諸問題を共に考え、革命的解決を追求することにした。闘う労働者諸君との相互交流、連合の一契機として、積極的利用を！

IWT

日時 毎週金曜日 夜六―八時 場所 麦社（目白または池袋下車）TE
L 九八七―五七六五

オランダ

プロヴオと妖精党

蔵田一夫

いつか新聞に、オランダで「妖精党」を名乗るヒッピー(?)たちが選挙に進出した、という記事が出ていたのを、あるいは読者もおぼえているかもしれない。スクラップを作らなかつたので詳しいことは思い出せないが、他愛のない話題を提供する「海外トビックス」欄のこの記事がめずらしく私の印象に残ったのは、彼らがクロボトキン主義者を自称しているとの一行が目に入ったせいであらう。

ヒッピー——選挙——クロボトキン、この取合わせは、なんとも奇妙にみえるが、それだけ私の好奇心を刺激したものである。少し調べてみると、これが、なかなか面白い。妖精党の母体とみられる「プロヴオ」ともども、じつにユニークなものである。日本の学生運動などには稀な発想、センスが、そこにあるように私には思われる。資料も十分でなく、私自身わからないことも多いが、ともかく紹介することにしよう。(以下、主としてルドルフ・デ・ヨングによる。)

「青年の反抗、ないし「非行」のはじめての組織化、「非行」体験に政治的形態をあたえたもの」とされる「プロヴオ」は、墮落した「芸術」の世界を抜け出した者と新たな行動を模索するビートニック大衆の出会いによって生まれたものである。後にプロヴオ運動の推進者となるロエル・ヴァン・ドゥインは、イギリスの百人委員会(リード、ラッセルなどが参加)の影響を受けたアムステルダムで活動家であり、ダダとアナキズムを結合しようとしていた。彼は、あるハブニングを見て、ハブニング参加者のなかにアウトサイダーたちを見出し、彼らを「プロヴオタリアート」と名づける。彼らは、指導者とテレビに自らを売り渡したプロレタリアートないしブルジョアジーや固苦しい連中には属さないが、ある巨大な反抗者の群に所属しているのだ。ここから「プロヴオ」の運動がはじまる。

プロヴオと一口にいっても、じつに様々なものがあつたようだが、共通している

のは、「権力に対し想像力を、想像力を働かせるノ」ということである。想像力は、日常生活において、職場でも大学でも、既成左翼運動においても、真に発揮しえずにあるのだ。ロエルは、インタヴューに答えて、次のように言う。

「俺たちがアタマにくるのは、個人が物事になんの影響力もないことだ。ハブニングは、本来キミのものであるはずなのに権威がキミから取上げようとしているものを、少しでもつかまえようとする試みなんだ。だからハブニングとは、キミがもとんとする力、物事に対する影響力の、デモンストレーションなんだ」。

プロヴォオの最初の思想は、結果に對しなんの幻想も抱かずに、社会全体と挑発することであつた。(いうまでもなく「プロヴォオ」は「挑発する」に由来する) プロヴォオの同名の機関誌は、次の宣言を巻頭に掲げていた。

「プロヴォオは、アナキスト、プロヴォオ、ビートニク、ブレイナー、シザー・グラインダー、囚人、純柱行派、魔術師、ポテトチップ野郎、平和主義者、ほら吹き、哲学者、保菌者、女王の馬の飼育係、ハブニング参加者、菜食主義者、サンジカリスト、サンタ・クロース、幼稚園の先生、アジテーター、放火魔、見習い店員、自慰行為者、梅毒患者、秘密警察、その他の下層階級、のための月刊誌である。

プロヴォオは、資本主義、共産主義、ファシズム、官僚制、軍国主義、専門主義、教条主義、権威主義に反対するなにかである。

プロヴォオは、絶望的な抵抗か屈辱的な消滅か、を選ばねばならない。

プロヴォオは、どこでも可能な限りの抵抗を呼びかける。

プロヴォオは、結局はダメであろうと知りながらも、社会を挑発する心からの試みをもつてもう一度おこなうチャンス逃がすわけにはいかない。

プロヴォオは、アナキズムを抵抗の精神の源泉と考える。

プロヴォオは、アナキズムを甦えらせ、青年にそれを伝えたいと望む。

アナキズム運動との関係は、プロヴォオの運動をはじめた連中が、アナキ月刊誌『限界をこえて』(現実のなかで、だが限界をこえようとする。青年の間で好評)の読者であつたという程度のことらしい。『限界をこえて』の編集者であつたルドルフ・デ・ヨングは、「プロヴォオの行動には刺激されたが、同時に、そのアナキズムには戸惑った」と述べている。

プロヴォオは、その後、青年の間に驚異的な拡がりをとげ、「アナキスト、プロヴォ

オ、……」等に分類することができない諸グループの間に多くの共鳴者を見出したとき、急速にベシミステイクな外貌は薄れ、最後にはなにかをかちえることができる考えた。社会への挑発は、既成のものへの、権威および警察への、既成のものへの嘘偽の価値と感覚への、挑発となった。(もともと「白い自転車計画」——アムステルダム市内から自動車を締めだし、誰でも自由に乘れる数千台の白い公共自転車に置き換えるプラン——のような提案もプロヴォオによってなされた)。

皮肉なことに、エスカレーションは、プロヴォオの挑発や非暴力的行動によってというよりも、警察権力の暴力的反動によってもたらされた。警察は、プロヴォオ誌の街頭配付や平和的ハプニング「イメージ、イメージ」の叫びを容赦なく弾圧した。ペートルクス王女の結婚式(六六年三月一日)の際にプロヴォオは行列に発煙筒を投げ、警察は露骨に攻撃を開始する。さらに、六月一三日には、組合官僚に反逆する建設労働者のデモに、警官が襲いかかり、死者が出た。翌日、労働者は反動の新聞社を逆襲し、騒乱状態が現出する。

「非政治化した」大衆の一部からプロヴォオに対し共感がよせられるが、既成左翼、組合官僚を含む圧倒的多数の秩序派からプロヴォオは完全に排撃され、マスコミはあらゆる偏見を利用して(長髪、ドラッグ、怠惰、非社会性等)「プロヴォオ狩り」キャンペーンを必死に展開した。しかし、それにもかかわらず、六六年の阿姆斯特ダム市議選で、一万三千票——一議席をプロヴォオは獲得している。

その後、プロヴォオは、一方では体制側の巧妙な対策、他方では量的拡大と裏腹の質的低下によって、オリジナリティが薄れ意義を失っていく。情況主義インタナショナルが批判するように、叛乱がプロヴォオ指導部の迷惑をのりこえたこともしかなうようだ。しかし、痛快なのは、それを自覚した彼らが、六七年五月に突如、「プロヴォオの死」を宣言するハプニングをおこなったことである。プロヴォオ誌第一号が現われてから、わずか一年八ヶ月であった。

プロヴォオの影響を受けて生まれた妖精党のオレンジ自由国は、プロヴォオ同様若干の人々と行動とが一緒になって創られた。市議となったかつてのプロヴォオであるロエルは、オレンジ自由国の駐「外国」——といっても外にある訳でないが——大使第一号となった。どうやら、選挙は「大使」を送りこむためらしい。

妖精党とプロヴォオを比較すると、前者は「フラワー・パワー」「愛」の要素がより大きく、後者のバクニン主義的色彩に比してクロボトキン主義的であるとい

う。妖精党は可能性をオプティミスティクに考えており、挑発、攻撃するのではなく、現実の問題に立向かい、非権威的な提案を対置しようとする。たとえば、空家の占拠運動、アムステルダム街に勝手に木を植えること、自然食品の店を作ること、などを提案し、実行している。

従来のアナキストが国家権力からの解放をもつばら考えていたのに対し、妖精党は、建設されるべき代替社会を前面に押し出そうとする。革命の夢をむさぼっていたオールド・アナキストが失っていた現実への影響力を、プロヴォー——妖精党は取戻したのである。しかし、彼らは現在の社会のなかで行動するが、現実の基準や限界に従属してはいない。妖精党は、権威主義的社会の価値を無視し、ただちに、別の社会を創造しようと行動するのである。

だが、問題は、彼らの行動が、現代資本主義社会の権力と階級構造を真に変革することができるとかどうか、である。現実の権威主義的社会は、妖精運動の拡大とともに、死滅していくだろうか。

私の答は否定的である。少くとも、 \blacktriangle 暴力 \blacktriangledown ないし \blacktriangle 武装 \blacktriangledown の問題に明確な回答を出さない限り \blacktriangle 変革 \blacktriangledown は中途半端なものにとどまろう。これら二つの運動は \blacktriangledown 抑圧的寛容 \blacktriangle の典形的所産であるとする左翼からの批判は、一面の真理を衝いている。とりわけ情況主義インタからの、「プロヴォーは、局部的にあれこれを選びながら、結局は全体を受けいれている」、「生産体制の批判をおこなえないままであり、それ故、体制全体の囚人なのである」、との批判は、妖精党も免れないのではないだろうか。

とはいえ、この二つの運動が、従来の政治的運動が見失いがちであった \blacktriangle 想像力 \blacktriangledown を、現実のなかで発揮しようとしていることは高く評価しなければならぬ。イメージの涸渇した古典的図式によってこれらの運動を切りすることは、きわめて容易であるが、しかし、なにももの生み出しはしないのである。

「静かな革命」を構想するデ・ヨングと私の立場はかなり異なるのであるが、さしあたり、次の結論は一致している。

「妖精党は未来を自らのものにするだろうか？ プロヴォーの死をもたらした問題と危険はいまなお存在しており、おそらく、妖精党も他の改良主義的組織のように改良的な運動となるだろう。しかしながら、いずれにせよ、 \blacktriangle 未来 \blacktriangledown は妖精党の反権威主義的 \blacktriangle 想像力 \blacktriangledown を必要としているのである。」

ヒッピーといえは

秋山 清

ヒッピーといえは、長髪に髭と鬚、きたないということが通り相場になつていゝる。それはその通りだ。そして首都東京、花の都の名物でさえあつた。その一人ひとりにどんな反論があり、主張があつてのことか、きいてみたこともない。にもかかわらず私などの心のどこかに、やり切れない不協和なきしりをのこしながら、彼らがすくなくとも現在体制側のものにはないという奇妙な安心が私にはある。私は駅頭やそのあたりで彼らを見かけただけである。語りあつたこともなければ、親しんだことも、にくんだことさえもない。まったくの他人同志だ。

私と彼らとどっちが人情に厚い存在だろうか。これはちよつと計りがたい問題だろう。確信をもつてそれをいうことはできない。国民とか民衆とかについて私が少なくしかほとんど考察することがないように、彼らはそれ以上に関心が薄いのであるまいか。自分のことで手いっぱい。それも未来などについてではなく、もっぱら今日のこと、今夜のこと、でしかないように想像される。それが悪いのだと頭からきめてかかる世間の常識にとつては如何に鼻もちなぬものだろうか、ということとは想像にかたくない。ついに彼らと常識との間に対話は成立しないだろう。ということがすでに現在の常識となりはてているかに見える。

かくては彼らの存在も世の片隅に押しやられてしまふだろう。彼らが抵抗し、それを超えて軽蔑し、無視し、非在のはてにまで自己貫徹をする姿勢をつづけ得たとしても、相手側はようやく無関心によつて抹殺するというシャラ臭い方法を、いまや身につけてしまったようである。一つの社会の中で相まじり合うことのない二つのものが無視し合つて存在するということのムダがここに発生している。

私は彼らを外見だけで知り、外見だけで信じているのだが、世間はようやく彼ら

におどろかなくなりつつある。出現のときの強烈な印象が薄れてしまいつつあるようだ。彼らにとってそれはどうでもいいことかもしれないが、こっちはそうはゆかぬのだ。その汚く臭くポロポロの印象ほど戦後の日本とは日本人の民主主義なる政治と思想との荒唐を衝いたものはない。ただ今スト決行中、と書いて何本も何本もひるがえっている赤旗などは比較にならぬ強烈な嫌悪を人々の意識の底に沈澱せしめるものであった。そのとき人々は、自分たちが気もつかぬところで体制側の常識に侵され、それに組する者でしかないことをほとんど無意識のうちに自覚したのである。

彼らにたいする嫌悪の情の本質がそのようなものであることを、気づいている人は大勢いるはずだ。はつきりそれを自覚、認識し得なかつたとしてもすでに嫌悪という内部の肉体的反応によって自らそれをたしかめているのだ。

さて私は、今日何をいいかけているのだろうか。私はたしかにヒッピーたちや彼らに伍する若者たちの生態に同調と嫌悪とを同時に意識する。そのことを意識する自分のなかに現状維持を気づかずに支持しつつある自分とその自分を拒否する自我を、同時にさぐりあてる思いだ。明けくれする日常生活の下でいま私の最高関心事は、どのような主張、あるいは革新の思想を所有する人といえども、現実生活の中では意外に、自分自身を裏切りつつあることの実態を曝露してはいないか、という問題である。むろんそれを曝露しているということだけが誰をも非難するのではない。生活とわが精神的覚醒とのギャップという自覚こそ、われわれを自分の内部から変革せしめるモメントであると知る故に、私はそのことに関心する者である。

共産主義者、無政府主義などといっても、そこらに働いている民衆に、これというほどの落差をもつ存在ではない。一個の人間としてのトータルは何れが上であるか知れたものではない、といったような自戒が私をとり込めている。この自覚は、ヒッピーなどといわれる存在に別な注目を強いる。彼らは現実の社会生活を軽蔑し、別個の社会生活を己に強い、実行し、次元の異なる生き方を探求し、あるいは実行しているといえないだろうか。そういうに値する存在が必ずなければならぬという期待を伴って私は彼らを見る。近頃の流行現象かとさえ見られている共同体についても、私の中にはそのような羨望を伴って見ようとするものがある。彼らは実行している。理解の不十分、解釈の間違い、不合理、経験の不足、世間の安定好きの大人どもから見れば奇々怪々にしか見えない彼らの行動が、行動として発する

のは、今日の現実を拒否することの反射的な現実化であるのではないか。すくなくとも観念論ではない。家、家族、生活、安定、平穩、結婚、恋愛、私有、生、死、うたがわれもせずのさばってきたこれらの観念と習慣、道徳とが、ここでは総なめに疑問符を押しつけられている。服装から起居についてまで、もう一度、原初にかえて考え直さるべき契機が要求されているのである。

彼らの個々が、永統的に現在の姿で持続するか否かは問題ではない。それはちょうど、わが国で明治大正昭和とつづく社会主義や無政府主義運動の中で、多くの人たちが退き、転向してしまっても、運動そのものは消失せず持続してきたことと、どこか共通する。若い反撥でのみ終るとしても、国の総体、社会の全般につきつけない否定精神、その自主的な息吹は生きつづけるであらうし、生きつづけねばならないものである。

革命とか革新とかいう言葉もいつの間にか生々したものを失ってしまった。革新は今や嫌悪さるべきものとしてのみ、その精神を生かしつづけ得られるであらう。拒絶反応を民衆におこさせないような革新はあり得ないのではないか。これも亦マスコミュニケーションという現象の及ぼした現実へのマイナスである。平静なものや汚れないものも古いのだ。たぶんこのような言葉はヒンシュクを買うだろう。ヒッピー族は、このヒンシュクを楯として彼らの「反対」の精神を表現しているのだ。いや、それによってのみ、表現し得ているのだ。あのをす汚たなさ、システムの定まらない表現や統制も統一もない存在の不安定が、アッピールするのも亦その故でしかないだろう。

彼らは彼らとして明日居ないかもしれない。彼らがここに居なくとも彼らは精神として存在をつづけるだろう。散らばって都会から地方に、過密地から過疎地へ分散し、果ては消えさるものであったとしても、一九七〇年代にそれが存在したという歴史は消失することはない。彼らを生み出したのは、戦後の民主主義とその政治だからである。

反体制とか、反政治とか、反権力とか、それらのもの生み出した数々のものの中で、一番生き生きとした息吹をもつのは、ヒッピーの極端な自己中心主義と極端な自己放出の精神の合一する、彼らの生き方である。

彼らを民衆が嫌悪するのは、自分の未解放な内部を、いじめられることの自覚が、悲しいからであらう。

反文化と意識革命

江川 允通

ジョー・ヒルが上映されている。IWWの活動を描いたものだ。長々と写し出される彼の処刑のシーンは凄惨だ。だが労働運動の闘士の型にはまった苦闘物語にまつわる悲壮さは、この映画にはない。彼らの組合運動も、一セントも持たずの放浪生活も、歌声に伴われ、独特な明るさに包まれている——自由と自己への誠実が溢れているからだ。それは「献身や犠牲……を一掃する」という革命運動の新しい傾向とも適合している。¹

ジョーの漂泊の魂は、自己の発見の旅に青春彷徨を続ける現代の若者のソールと相通じるものがある——ジョーの歌う歌が、ジョーを歌った歌が、若者の心の奥底から奔り出る叫びであるように。そこにこの映画が多くの観客にアピールするものがある。そしてこの映画の意義は、(労働運動という形での)左翼運動と、音楽や放浪という文芸や生活様式上の運動(それも多分にヒッピー的なもの)との今日のアメリカにおける合体に、すぐれた表現を与えたことにあるだろう。

かつて英国の「怒れる若者たち」がもはや若くなくなつたとき、彼らは怒ることもやめてしまったのか、と問われたことがあつた。今、イッピーもその第一字Yが意味するヤングさをまだ持っているか疑われるが、どうなつちやつてるんだらう？ 彼らがヒッピーにとつて代わつたように、彼らはクレージーにとつて代わられた、というところまでしかわからない。そして、フラワー・チルドレンは、まだ子供のままなのか？ アメリカで、いま、何が起っているのか？

六七年、花と咲き誇つたヒッピー、六八年、世界的な造反の季節に高揚した新左翼運動の学生たち、そしてイッピーにおいて効果的に情宣されたこれらの相互接近

さらに「ジョー・ヒル」をバエズが高らかに歌ったウッドストックでのアメリカの「文化」による「革命」の可能性の劇的表示——このような現象を包括し総括し、アメリカ社会ないしは現文明にさし迫る重大な変動の兆候としてその意義を解明しようとする試みが、すでにいくつかなされている。²ここでは、主として、その代表的なものであるライク『綠色革命』を紹介しながら、それがわれわれの運動にどのような意味をもつてくるのか、を考察してみたい。

われわれにとつて興味深いのは、ラーナーが、反文化カウンターカルチャーという包括的概念と対応させた諸現象をアナキズムとの関連において論じていることであろう。今日の若者の運動のなかには紛う方なきアナキズム的傾向が現われている。それはアナキズムの再生というべきものであるが、それは新しいアナキズムとしての再・発生であつて、「息ふき返した死人が棺桶の内蓋を叩いているような」昔のままのアナキズムの単なる復活とは違ふ、と彼は説いている。

ラーナーが多数派専権主義マジョリティリアリズムの拒否などととも、³新旧アナキズムの類似点の一つとするものに、暴力の容認がある。しかしライクは直接行動を暴力的傾向としては認めず、革命の手段としての暴力には否定的である。

ライクの『綠色革命』は、類書のなかでもバツグンに分析も鋭く、最後に出ただけあつて最も包括的であり、創造的業績として価値が高い。(けれども類書と比較すると、ライクの立論のうちには既に他文献に現われているものもあれば、ライクに触れられてはいないが他書には扱われている重要事項もないではない。)

彼の貢献は、従来「テクノストラクチャー」、「産・軍……複合体」「科学技術国家」などと呼ばれ、そしてそれによつて一側面しか捉えられなかつたものを、**統合国家**という概念を立ててそれに包摂していることである。この統合国家こそ現代の諸悪の根源なのだ。

これに対するアンチテーゼとして人間の側に発現したものを、ライクは**意識Ⅲ**と名づける。ローザックやラーナーが**反文化カウンターカルチャー**と、文化人類学の用語を借りて呼んだものである。

ライクは、特に意識Ⅲのライフ・スタイルを、服装、職業、音楽(ロック)、他の人々との共存様態、ドラッグ、といったヒッピー的諸側面に強調をおいて描写している(そしてこれらが強調されることこそ意識Ⅲの特色なのだ)。ひとたびこの新

しい意識の性質が明らかにされると、その意識がⅢでないアナキストなんてナンセンスだと思われる。

意識Ⅲという概念の創出により、その外延の諸現象が解明されるだけでなく、これと並んで意識Ⅰ、Ⅱという概念も立てられる。Ⅱは、統合国家をつくり、その歯車としてその内に棲息するホワイト・カラー（ミルズ）とかオーガニゼーション・マン（ホワイト）などと呼ばれてきたものの意識である。Ⅰは、日本人のイメージに根強く残っているアメリカ人——ビューリタンで野球好きで、代表者はリンカン——のそれである。

重要な事実、アメリカでは現に意識Ⅲが「若者を越えて」広まりつつあるということだ。これについてのライクの記述はそれほどさえないが、われわれの観察でどんどん補充していくことができよう。他方、統合国家は自壊の末期症状を呈しており、だから意識Ⅲの自然な広まりによって社会の変革は達成される、意識による革命こそ変革を実現するのだ、と結論される。

ライクの所説に対しては批判も多いだろう。しかし、特に意識ⅠやⅡをもってする批判は不毛なことを強調したい。意識Ⅲでなければ反文化の諸現象を、理解するどころか、観察さえできないのである。

筆者は、他の部分は高く評価するが、意識による革命という結論に対しては疑念を抱かないではいられない。ライクは彼の主張がマルクスの理論と矛盾するものではないと説くが、古典的革命観とは真向から対立するものだ。

もつとも、もしかするとアメリカにおいては意識革命は可能かも……と筆者も考える。アメリカ合州国という古代ローマ帝国の再生を見ると、キリスト教迫害から公認へのような転回が絶対ありえないとは思えない。現にフルンチョフのソ連と手先諸国の頭越しに手を握ったではないか。同様なことが近くまた起ころうとしている。三回目もありそれが社会主義への転回だ、ぐらいのことはないことではない。

西洋では、段階AからB、BからCへ、という歴史的進展が、AならAが発展の極に達し、内的矛盾が累積した結果の必然的自動的移行であることが通則である。——少なくとも学問の課題はその必然性、自動的機制を見出すことになっている。

だからアメリカでなら意識ⅡからⅢへの自動的移行が、古典的革命なしに、必然的なものとして可能なのかも……ⅠからⅡへがそうであったように。（だがこのような文明史的展望は、どういうわけかここで参照した著者たちには採られていない。）

ところが日本では、文明的発達における必然的自動的段階移行はあまりなかった。恐らく弥生時代が始まることから、外来先進文明に突きとばされては次の段階に移り、移ったあとでも前段階の残滓をたくさん残している、といったことが何回となく繰り返されてきた。アナキズムと共通点の多い意識Ⅰは日本には無く、有ったのは中世的な意識マイナスⅠだ。この出発点の違いは、そして意識マイナスⅠの残滓がまだまだあることは、意識Ⅱをもダッシュ付きのものにしてしている。そのような社会で意識Ⅲによる非古典的革命は果して可能だろうか？

ライクと大沢正道氏の「古典的革命観からの解放」には共通の傾向が見出されるが、大沢論と比べると、ライクには古典的革命と意識革命との間に大沢氏のいう大叛乱時代のような革命の現代的形態についての考察が欠落している。「大沢氏が説くように、現代の革命は長期化するであろう。けれどもそれは必ずしも暴力性の稀釈を意味するとは限らないだろう。だからといってライクのような革命恐怖症は、非現実的の革命観の所産といわなければなるまい」

他方、ライク理論にある世代交替という意識革命の主要要因はユニークなものはあろうが、中世の残滓がなお多く、意識Ⅱ、特にそのリベラリズム、が十分な発達を上げていない日本において、△中産階級白人の親の意識Ⅱ（リベラリズム、ヒューマニズムの実現されない理想・子に対する非権威主義的態度）——子における親の理想の実現としての叛逆（意識Ⅲ）▽という公式に従っての世代交替による意識Ⅲの広まり、それを通じての意識革命が可能だろうか？

もう一つの疑問は、意識革命といってもそれは全面的解放を達成する完全革命ではなくて、単なる変化に過ぎないのではないかというのだが、これについては別の機会に述べたい。

六七年、日本にもヒッピーと対応する現象が見られた——フーテンだ。彼らがた

▼乱 RAN ▲ 特集「クロンシュタット叛乱」

9号 2月20日発売

定期購読

(一月中に限り) 六号分五〇〇円
(一ヶ月以降) 六号分六〇〇円
(二ヶ月以降) 六号分六〇〇円
(半年) 六号分三〇〇〇円

むろする新宿は、ほんとうに楽しいところだった。LSDは店の名前でしかなく、ハイジャンをのんでラリッてるぐらいのことだったけれども、みんな何か楽しいこととがありそうだとウキウキしてジュークに集まってくるんで、実際楽しさがいっぱいだった。

それから五年、ビルはたくさん建つても、ネオンは輝いても、その下は暗い谷間だ。ギンザみたいに意識Ⅱがのさばってきた。ハングラが死んで、詩ん宿は死んじクになった。LSDは閉ってしまい、ジャズ・ヴィレももうない。今もシューチヨーがまだバーランドをやつてるし、クロチャンのセ・ラ・ヴィにはときどき誰か来てる——二つ三つ残された保留地におしこめられたインディアンみたいに散り残るフラワー・チルドレン。花はどこへいったの？ 教えてくれる人もいやしない。

けれども花を散らした嵐はちゃんとわかっている。それは警察の弾圧なのだ…… 怨こんな日本で、中世の蛮風が強く残っている日本で、必要なのは、成功しうるのは、どんな革命なのか？ 恋は水色、革命の色は何色？ 古典的革命の赤色か？

意識革命の緑色か？ 総破壊の黒色か？ 意識Ⅲの広がりやを、その発生さえも、妨げているのは、国家権力による暴力的な弾圧ではないのか？ ごく素直に考えると、意識革命が起こるためには、意識ⅡからⅢへの移行のためには、その障害を除去するための、古典的革命ではないとしても帝王切開手術にたとえられるものを伴う先駆的、部分的革命がまず必要だということになる。現代西洋工業文明の死に至る病の毒に冒されて枯れかかっている生命の黄金樹が再び緑に萌えるのは、流血と鉄火の、赤と黒の旗の、はたためく彼方においてではないのか？

そうした先駆的革命を勝利させるために必要なのは何だろうか？ 現代の統合国家に対する全体革命は、長期化し多段化するとともに多面的になっていく。国家資本主義という社会システム（という統合国家の側面）に対する反体制運動と、権威・秩序・道徳・良俗などのエスタブリッシュメント（という統合国家の側面）に対する反体制運動とを併行し、戦略的に統合して遂行することが、大叛乱時代を越えて全体革命を勝利の彼岸に導くものであらう。

最後に、そのための指針として説明すべき理論的課題をあげておこう。

1、ヒッピー的なもの、反文化、反体制運動、およびそのような現象の生起する次元（服装、音楽、ドラッグ、等々）が体系内に座を占めうるような理論へのアナキズム理論再構築。

2、アナキストの意識の転回——その障害となる「性格の鎧」(W・ライヒ)の解除——快樂不安からの解放、そのための方策(自己権力奪回の教育論)。

3、2のために快樂肯定的倫理の確立。「楽しいことは悪いことだ」とする悪い既成道徳(否、悪徳)と、これと相互強化的な醇風美俗とに対する総破壊のための理論攻勢。圧制・搾取とともに一切の抑圧のない社会・文化建設を主張する理論。

4、統合国家が暴力装置を用いて反文化、反体制運動を抑圧する理由についての理論的究明。それから抑圧機構粉碎の戦略の導出

注

1 江口幹、コーンペンディットの一句への私的感想、永久革命、—8+1(七〇—11)

2 Braden, William, The age of aquarius, Quadrangle, 70; Feigelson, Naomi The underground revolution, Funk & Wagnalls, 70; Lerner, Michael, Anarchism and the American counter-culture, in Apter, D., et al, eds, Anarchism today, Macmillan, 71; Reich, Charles A., The greening of America, Bantam, 71 [邦高忠二「緑色革命」早川書房「71」]; Roszack, Theodore, The making of a counter culture, Doubleday, 69

3 秋山清、少数決、乱、三、(七一—三)も同じ趣旨

4 大沢正道、反国家と自由の思想(第三章、古典的革命観からの解放)、川島書店、七〇。甦る革命的暴力、黒の手帖、六(六九—一)。また反国家としての革命、思想の科学(七一—二)も参照

麦社よりのおわび

麦社のパンフレットのひとつとして、かねてより予告しておりました『私の見た日本アナキズム運動史・増補版』(近藤憲二著、秋山清解説)は、印刷上の手違いなどの事情によって、今年中の刊行は不可能な事態になりました。当初の予定よりも一〇ヶ月近くも遅れましたことは、誠に申し訳ないことと深くおわびいたします。

現在、来年一月中には刊行できるよう極力努力しておりますので、なにとぞ御容赦くださるようお願いいたします。なお、予約申し込みの方につきましては、出来上りしだいすぐにお送りします。

一九七一年十二月十五日

パンフレット編集委員会

アナキズム運動抄史(終)

日労会議結成事情

相沢尚夫

戦後の私は日本アナキスト連盟の全国委員になれという勧告を断わって、労働運動に専念した。戦後の労働組合は、戦前の労働組合とは全く異なっている。左翼労働組合方式が産別会議を破産に導いたし、アナルコ・サンデカリズムを基調とした組合結成を企図しても、思想の自由、政党支持、不支持の自由という戦後労働組合の原則にはばまれて、小さく固まるより仕方がないだろう。戦後の労働組合は、産報の裏返しだから企業別組合となったという批判は正しいが、その他に方法はなかったのである。それだからと云って企業別組合が正しいという理屈にはならない。

私は大阪ではいち早く(届出は三番目だったと云う)職場の組合を結成した。大阪製鎖従組といった。産別組合の連合が正しいと考えていたので、産別結成のためにも働らいた心算である。それには二見の獄友の共産党員西川彦義と協力した。彼はのちに大阪産別の議長にされた。ところが職場の組合は独自の立場を崩したくないと云ったので産別には加わらなかった。

私は一九四三年出獄すると直ぐ大阪製鎖造機という会社の工場に工員として就職したのである。元の同志と連絡してはならぬ。これが釈放の条件だと教誡師が云った。

「東京にいるときつと連絡したくなる。それよりも大阪へ行って働きたまえ」

こうして私は思想事件関係者の保護司をしていたその工場の工場長の監督下におかれたのである。だから工場には元共産党員や人民戦線事件の関係者がいた。私を含めてみんな転向したことになる。しかし話してみると、どうもそうでもなさそうだった。転向は日和見主義だと云えよう。一日も早く出獄して、党の再建を計ろうと考えて転向を表明した私も、鋼鉄の意志に欠けた日和見主義者と云われ

でも仕方がないと思った。在獄中に党再建の考えが変わった。

国家を破壊するためには暴力革命を認めない訳にはゆかぬ。力と力との激突は、共倒れもあるが、たいてい一方が勝利者となる。勝利者は敗者を抑圧する。抑圧する力は組織されるに越したことはない。国家は組織的暴力と云われるのは正しい。こう考えるともしアナキストが革命に勝利すると、アナキストが抑圧者になってしまう。これはアナキズムではなくなることだ。誰が云ったか忘れたが、アナキズムは敗北の思想だと云ったのは、この意味では正しいように思える。しかし敗北したのでは目的は達成しない。何かがありそうに思えてならぬ。

国家を建設すると、プロレタリア独裁だ、半国家だと云ってみても、必然的にスターリンの道を歩むものなのである。マルクスやレーニンの国家による国家死滅論の誤謬を証明して見せてくれたのは、スターリンだった。

こんなことをあれこれと考えていた。そして私はこの秘密は、レーニンが共産党をプロレタリアの外に、それは必然的に上になるが、組織したことが、国家の建設という思想と結合しているのではないか。無政府共産党もこの点から批判されるべきだと自己批判した。

私は出獄したら、もう一度勉強をし直そうと思った。しかし出獄してみると、もう動きのとれぬ状況だった。誰も口をつぐんでいた。私も口を開かなかった。時間給二十四銭の賃銀で残業を含めて毎日十時間労働に従った。

この会社の労働者は戦前、争議を経験していた。鉄工組合鉄心会があったのである。組合結成と一緒にやる人が誰かいるだろうと思つて探すと、元の闘士が職長のなかにいた。

「時世が変わったから、またやりまほか。鉄心会はすぐかつたで」と彼が云った。次は転向組である。

「もう運動はやめる心算だったが」と云ったが加わった。

当時は嵐のようなインフレの時代だったから、会社は戦争中の軍の支給資材の値上りだけで儲かったが、労働者はそうはゆかぬ。大幅な賃上げをしないでは、生きられなかった。私は労働者の生産管理で大幅賃上げを実現しようとする主張したが、組合結成準備委員会では、生産管理は労働者の自縄自縛となるという意見が強く、資本主義の下では経営参加が限界だという意見が大勢を占めた。そして四月二十六日、労働者の経営参加をスローガンとして結成大会を持った。私は今でも激動の時

代であったその当時、生産管理を実現しておけば、骨抜ききの経営参加に止まることはなかったような気がしてならぬ。委員中の共産党員から、アナキストはすぐ飛躍した考えをすると反対されたが。

この年の八月に地方労働委員の選挙が行なわれた。それを機会に産別、総同盟に加盟していい大多數の組合からも委員を出すことになった。委員長の谷口清がこの会合に出席した。彼はこの席で戦線統一論をぶってしまったのである。彼は戦後直ちに行なわれた戦線統一の申し合わせを破ったのは社会党と共産党にひきづられている総同盟と産別だとこきおろして、両者に加盟していい大多數の組合が団結すれば、両者を吸収する力になる。この話し合いの場としなければ、こんな会合は意味がないと演説した。

帰って来た彼は、「戦線統一の話をしろとは組合は決定していなかったが、あの場の空気でつい喋ってしまった。自分は戦線統一が急務だと考えていたので、脱線したんだが、云いだした以上何とかまとめなくてはならない。組合の了解はとるか、君何とかしてくれ」と云う相談を持ちかけて来た。いかにも彼らしいと思ったが委員長が公開の席で言明した以上、組合は知らぬでは済まれないので、当日の出席組合を中心として、大阪の総同盟、産別の対立に対して中立的立場の組合に働きかけて、大阪地方労働組合会議の結成まで持っていった。結成の眼目はもちろん戦線統一の推進であった。

その頃、大阪神戸のアナキストは、戦争中は、兵隊に行ったり、徴用されてか、工場で働らいていたが、戦後は失業して闇屋のようなことをして暮している有様だった。私は佐竹良雄に組合の書記になる気はないかと尋ねた。はじめは彼は企業別組合の中立組合などは御用組合だと云って渋っていたが、「アナルコ・サンデカリストが組合にはいらぬのはおかしい。仲間だけで集まっていて、大衆と結び付かなくては何も出来ない。それにボクは同志がいないので、助力もして欲しいのだ。それでも厭なら就職と思えばいいだろう」と勧めると、二、三日考えると云って帰った。こんな訳で彼は大阪小運搬労組の書記になったのである。

私は彼が彼流のアナルコ・サンデカリズムによって同志を獲得したらしい。私は事務局長の地位を利用して、助力も出来る。こうして同志が増加したら、中核体のようなものを作る計画だった。しかし彼は中核体という思想に反対だった。そして同志をつくると、外部のアナ連へ引き入れてしまった。彼が加わると、逸見吉造も

江西一三も加わって来た。私は逸見には組合をつくって加盟した方が発言力が強くていいだろうと云った。すると彼は早速、大阪合同労組をつくって、明確にアナル・サンヂカリズムを唱い、黒と赤の組合旗まで作って加盟を申し込んで来た。中執は私の作った加盟承認の原案を可決した。江西には、中小企業に組合を組織してそこに活動の基盤を持った方がいいのではないかと話した。彼は地味にコッソツと組合を組織して歩いて、加盟を申し込んで来た。これも中執は異議なく承認した。

大阪地方労組会議を結成して間もなく、東京地方労働組合統一協議会から合同の申し入れがあった。この協議会は山川均等の民主人民連盟の傘下の組合で組織した戦線統一促進のための協議会であった。だから大阪地方会議が特定のイデオロギーによらない組織であるのに反して、労農派的マルクス主義による戦線統一の推進組織とでも云うべき存在であった。三田村四朗と小堀甚二とがそこで激しく指導権を争っていた。

大阪地方労働組合は東京地方労働協からの合同申し入れに対して、共産党も社会党も民主人民連盟も組織としては支持しない。思想の自由、政党支持の自由を堅持する。労働者階級の階級的立場で自主的に政党の支配介入を排して労働組合の戦線統一を推進する。経済闘争も政治闘争も労働組合の自主的な立場で戦って行くことを主張して、この主張を認めるなら、合同の話し合いを進めようと答えることを決めた。東京労働協を代表してか、個人の資格としてかは知らなかったが、三田村も小堀も大阪へ何度も説得に来た。彼等は大阪のイデオロギーのない連中を説得するのは、簡単だという心算だったろうが、大阪へ来て見て、逸見などという有名なアナキストが加わっているのに、勝手の違う想いをしたことであらう。そのためか、少しも強引なところはなかった。

一九四六年十月二十五日に、日本労働組合会議は結成大会を持つ運びとなった。議長に谷口清を選び、事務局長には私が選ばれた。結成すると忽ちこの組合は三田村の組合だ。三田村が策動して、座別、総同盟に対抗する第三勢力を作ったのだという批評やら非難やらが流れた。有名人の三田村がいたら無理もないが、彼は役員にはならなかった。組合員でもなかった。そして外から自分の影響力を組織しようとしたが、遂に成功しなかった。そして反って組織の拡大の阻害となった。

日労会議の結成は、戦線統一の推進を目的としながら、それを固定してしまつたと批判することができる。流動する自由連合のうちにこそ、労働戦線の団結がある

と私は今考えている。私はアナ連に加わって固定するのを避けるため遂に加入しなかった。

これが日労会議結成の真相である。日労会議は一九四九年に東京無所属労組連合と合同して全日本労働組合連盟となり、その翌年戦線統一体としての日本労働組合総評議会へ加盟組合の産業別編成を条件として発展的解消をとげた。当初総評加盟に反対した組合も時間的経過をとって、夫々の産業別に編成を遂げて総評に加盟した。日労会議結成の目的は一応終わった。しかしその後も、労働組合は分裂と再編成をくりかえしながら、次第に官僚主義を生み出して、現体制に組み込まれ、下からの批判にゆれ動いている。

労働運動に対する反省は、イデオロギーに於ける反省と共にある。スターリンが批判される以前に、そしてアナキズム復活の声を聞く前に、その萌芽が生れた。一九五〇年一月の自由社会主義同盟の結成である。江口幹、白石徳夫その他の青年労働者によるこの活動は短期間に終わったが、それに続くスターリン批判、フランス五月革命、全共闘や青年労働者の闘争のなかから現代アナキズムが理論的にも実践的にも形成されるであろう。自由社会主義同盟は理論と行動に未熟さはあったが、その先駆であった。それはいずれ機会を得た時に書きたいと思っている。

編集後記

△文化▽だとか△反文化▽だとか、そんなことをいくら語ったところで大した意味を持ちはしないことは、充分に知っているつもりだ。必要なことは、実際の生活過程の中で、幽閉された想像力の復権、その翼を自由に押しひろげていく行為、ということだろう。

本号も結局は「語って」しまっているにすぎないし、紙面の都合上もあり展開不足の観をまぬがれ得ないかも知れないが、現実の運動の内に如何に生かしていくのが重要な課題だろう。

乱 RAN 8号

1971年12月20日発行

定価 80円 (〒25円)
 定期購読 6号分 500円 (〒共)
 編集委員会
 『乱』編集委員会
 発行所 秋山清
 社 麦

東京都豊島区南池袋1-15-21田中ビル207
 tel. (03)987-5765 振替東京 144722

乱

RAN

バックナンバー

1号

△アナキズム神話▽をどう超えるか——藤川健郎／アナキスト官僚性の育成!?——江口幹／「土着」ということ——秋山清／わが国における反逆の原点(1)——鳥越弘之

2号

観念としての△階級闘争▽からの袂別——西田弘和／企業別組合における職場集団——柚木峻／反権力——秋山清／わが国における反逆の原点(2)——鳥越弘之

3号

△市民▽の視角とアナキズム——高島通敏／現代技術と連合主義——D・ゲラン／我々の状況と革命の戦略／少数決——秋山清／わが国における反逆の原点(3)——鳥越弘之

4号

政治の死についての小論——島崎寛／混血の礼讃——大沢正道／文明総批判(抄)——北大闘う集団／△政治▽を超える政治闘争を——嵯峨潤

5号

「自己権力」論をめぐる断想——立原信弘／反ファシズム闘争とW・ライヒ——江川允通／労働者評議会の思想——パンネクック

6号

コミュニオンと△祭り▽——藤川健郎／大企業労働運動の思想的立脚点——柚木峻／黒色青年連盟最後の大会——相沢尚夫

7号

『特集・アナキズム運動の軌跡』 △対談▽相沢尚夫＋秋山清／壊滅せる地下運動の企図——蓮台寺晋／“五月”以後のバリ寸感——江口幹

1号～4号各七〇円、5号～八〇円(〒各二五円)、1～6号
揃五〇〇円(〒共)

私の見た

日本アナキズム運動史

増補版

近藤憲二 一月刊行 予価三〇〇円(〒45円)

大杉の片腕として活躍した著者が体験をもつて語る日本アナキズム運動史。基本資料としても高く評価される。再版にあたり、新たに秋山清氏の解説を加えた。

五月革命の考察

三八〇円
(〒45円)

江口 幹 最新刊 発売中

先進文明国家への叛乱の原点は何か。管理社会と呼ばれるものの強さと弱さを、フランス五月の総括を通じて検討し、現代革命の戦略の構築を試みた好著。

全体革命への序説

一五〇円
(〒35円)

大沢正道

「アナキズムの原理と原則」「プロレタリア独裁と連合主義」の二論文を収録。研究会テキスト等に好適の入門書。

研究会等で十部以上まとめて申込みの場合、割引あり

アナキストの文学 独裁と革命

秋山 清

二四〇円
(〒45円)

ファブリ

残部僅少
二〇〇円
(〒35円)

麦 社

東京都豊島区南池袋1-15-21 田中ビル207
振替口座 東京 144722 tel (03) 987-5765